

東京外国語大学 組織的な若手研究者等海外派遣プログラム（短期派遣 EUROPA）
国際連携による非英語圏ヨーロッパ諸地域に関する若手人文研究者海外派遣プログラム
派遣報告書

報告者：博士前期課程 2 年 笹山啓
派遣先：ロシア国立人文大学(モスクワ)
派遣期間：2012 年 4 月 1 日 ～ 10 月 1 日

派遣概要ならびに成果

今回大学の短期海外派遣プログラムを利用するにあたり目的としていたのは、まず修士論文執筆及びその後の研究活動に必要な資料の収集、次にロシア国立人文大学のロシア語研修センターでの語学研修、そして大学でロシアの現代文学を専門に研究・指導を行うジャンナ・ガリーエワ先生の指導を仰ぐことであった。

資料収集に関しては書店、図書館を活用し、報告者の研究対象である現代作家ヴィクトル・ペレーヴィンを扱った書籍や論文をかなりの数集めることができた。特にロシアで執筆された学術論文を閲覧・コピーできる国立図書館別館ではペレーヴィンに関する学位請求論文が数多く見付き、作家に関する学術的な研究がロシアでは本格的に開始されていることを実感した。作品の翻訳以外の研究資料が日本で不足している現在、今回の渡航調査は研究に資するところ大であったが、一方で報告者の主たる関心領域であるところのペレーヴィン作品への東洋思想の影響を中心に据えた論考にはほぼ出会わず、今年の 3 月に出版された作家の伝記兼作品論にペレーヴィンの作家デビュー以前の神秘主義サークルへの出入りに関する記述が見られる程度であった。とはいえこうした事態は事前の予測からさほど外れていたわけではなく、むしろその明らかな影響関係に関する論考が依然不足している現状を確認できたということにほかならない。また副次的な成果として、ペレーヴィンと思想的な連関が認められる数人の作家について新たな情報が得られ、博士後期課程進学後の研究の見通しが広がりつつある。

ロシア国立人文大学での語学研修では、ロシアの文学や文化に関する専門的な授業を受講することができた。とりわけ読解の授業はチェーホフやアンドレーエフなどロシアの古典作家に関する内容の濃いものであった。主にヨーロッパ圏の国々からやってきていた他の受講者たちはロシア語のレベルも教養的なレベルも非常に高く圧倒されたが、彼らのおかげで実りのある授業時間を過ごせたと感じている。

大学での指導に関しては、月々の面会や大学の授業への参加の機会を設けていただいた。授業は学部生向けのもので、70 年代から現代にかけてのロシアの重要な作家の作品を取り上げ解説していくものであった。報告者が専門とするペレーヴィンについての授業は滞在日程の都合で聴講することができなかったが、未読の作家に関する講義は貴重なものであった。加えてロシアの大学生の積極的な授業態度にも大変感銘を受け、有意義な授業体験

となったように思う。さらにガリーエワ先生には夏季休暇中に執筆しウクライナの学会へ投稿した論文に対する評価もいただいた。先生が多忙であった様子で連絡のつかない時期もあったが、多くの時間を割き日本からの研究生を相手に真摯に対応をしていただけたことに感謝している。

上に言及した論文についてだが、これは10月にウクライナのシェフチェンコ記念文学大学主催で開催された「第4回国際学会『歴史的・理論的ポエチカの今日における諸問題』(IV Международной научной конференции «Актуальные проблемы исторической и теоретической поэтики»)に知人からの紹介を通じて、論文のみロシア語で執筆し投稿したものである。学会の運営側の査読を経て学会誌掲載の可否が決まる(連絡がないため結果は現在のところ不明)が、それとは別にガリーエワ先生に論評をお願いした。ペレーヴィンの長編2作品に登場するモチーフを手掛かりに、ペレーヴィン作品への東洋思想、今回の場合はチベット仏教の影響を明らかにし、そこからペレーヴィン作品に通底する一元的な世界観を見通すといった内容の論文であり、今年度東外大に提出予定の修士論文の概説的なものとなったが、そのためか短い論文にテーマを多く盛り込みすぎ、論証の部分が疎かになってしまったことや、チベット仏教という要素を強調しすぎ他の要素からの作品への影響に注意が行き届いていない点など、様々な批判を頂戴することとなった。初の海外の学会への論文の投稿ということもあり、予想以上の時間を費やしてなお満足のいく出来とはならなかった論考であったが、紙数にも余裕のある修士論文は批判の内容を十分に活かしてより良い内容のものに仕上げることができると考えている。

今後の課題

当面は1月提出の修士論文に取り組むこととなる。その後は博士後期課程に進学を予定している。今回収拾した資料を元に、ペレーヴィン単体の作品研究と合わせてペレーヴィンと思想的なつながりが認められる他の作家にも目を向け、20世紀後半のロシア文学における神秘主義(チベット仏教や禅などの東洋思想を含む)や実存主義といった思想の受容の有り様を探り、ロシアで独特の文脈にそって語られてきた「ポストモダニズム」という文学的潮流に属する作品群を別の側面から照射し分析していくことを考えている。